平成 31 年 4 月 8 日

東京学芸大学附属高等学校第 66 回入学式　校長式辞（抄出）

校長　大野　弘

本校は、大学受験で役立つ勉強だけでなく、大学に入ってから、さらには社会に出て、一生役に立つ資質・能力を育てることを目指しています。ですから、二年生までは、ほぼ同じカリキュラムで広い教養を培い、三年生でも文理別のクラス編成はしません。これからの国際社会で必要なのは、文系のセンスと教養を備えた理系の人間、理系のノウハウと論理性を備えた文系の人間だからです。

また、真の学力を身に着けるためには、授業を中心に据え、十分な自主学習をすることが必要です。どんなに部活・行事で忙しくても的確に切り替えを行い、自主学習の時間を確保してください。苦しくてもその経験が人間を磨きます。是非、学習と部活・行事の二兎、三兎を狙って頑張ってください。

さて、私は、全校集会の度に一冊の本を紹介しています。先月の終業式では、フランクリン自伝を紹介しました。ベンジャミン・フランクリンは、1706 年にイギリス植民地であったアメリカのボストンに生まれ、1790 年にフィラデルフィアでなくなっています。葬儀は、アメリカ合衆国の国葬でした。

彼は、アメリカの政治家、外交官、ジャーナリスト、物理学者、発明家でありますが、なんといっても重要なのは、アメリカ独立宣言の起草委員の一人で、アメリカの社会システムとアメリカ資本主義の父として、世界史に燦然と輝く万能人であることです。雷が電気現象であることを実証した無鉄砲な人物であり、遠近眼鏡を発明するなど親しみ深い存在でもあります。

彼は、十歳までしか学校に行っていません。その後、主に印刷職人として働き、新聞に寄稿し、印刷工場を経営し、さらには新聞を発行する。その間、フランス語、イタリア語、スペイン語等を学び、世界的に有名なペンシルバニア大学を設立し、オクスフォード大学から学位を送られています。その後は、政治家、軍人、外交官として活躍、ついには先に述べたように世界史に残る人物になっていくのです。

私が彼の自伝から学んだことは、「勤勉な楽天家」という生き方で、これは私の座右の銘となりました。「結局は何とかなるさと楽天的に構えて、日々の自分の責務を誠実に果たす」ということです。この生き方は彼の次のような言葉に表れています。

「困難を予期するな。決して起こらないかも知れぬことに心を悩ますな。常に心に太陽を持て。」

「仕事を追い立てよ。仕事に追い立てられてはならない。」

「憲法が与えてくれるのは幸福を追求する権利だけだ。幸福は自分の力で掴まなくてはならない。」

「私が自分だけのために働いているときには、自分だけしか私のために働かなかった。しかし、私が人のために働くようになってからは、人も私のために働いてくれたのだ。」

正に、逞しい自主自律の人、社会に貢献する人物です。

もちろん、誰でもがフランクリンのような成果を収めるわけではない。しかし、誰でもが、フランクリンのように生きることはできます。新入生の皆さん、附属高校での三年間を「勤勉な楽天家」として生きてください。附属高校で、皆さんの可能性を精一杯引き出し、夢を実現して下さい。私たち教職員は全力で、指導に当たります。